

中村俊定文庫
文庫 18
296





序

涼装は岫の贈り草稿
ぬい多か賀し伊勢大和乃
以雅くくお洛東身北

北極

病床のほれく
くくくく

延享丁卯冬

山百梅



44

内宮紀行

鮎お辞

希同

却用新伊去年のミウ花梅の花
咲以多ん秋葉中に木さむく
起ては卯山の雲さけし即して
湖川の月分やねあくるもに志
あふれり他ありさる海葎の風
にくれ多二尺のまにあむい

麻のたりのちまねやすくて川と
くもあねあゆく道芝に席を敷け
合飲みあけ明かに花下縁さ

暮柳舎多お

清きとちくゆく水や柳舟 却用

松任乃里ちちよ女と同ふ凡雅乃あ
いまま云り市中に卯人の春
つたれさるる感

深く争位やハゆ ね 畑

何あいきり

ねと明—あまきの凡沙の追

伊勢の古浪

今昔の留の故情を草花

管に定乃及なよあ

非同鼓 起用ゆり新

酔うまゝ 裁の志くれマヤの等

秋同ちりきき立口くら

夕の欲のちよあひくらあうり

烟にあつと床けーら

お食の月のおとほしやん

踊の移くいほり舞

あつと柳のちね又うら

あふとあつと風

ゆくとねと舞のほが解

鐘の縁へ酒盞のざれ

三

かきまき油畑ハみそりり
穴、あつちとるくく紙
元くふぢの腋七舌のぢ
草のけまハ鎌倉の 耻
宿妻ハきけく明く月落く
空の大工此ま何くま
おの陰茶くも持くたまにん
枕、ちたふくけさく

豊 踏 同 玉 絡 同 豊

ちゆのなと春のうちにユマ
土賣ちと妹ま子と泣あ、
船と尺八くやうのふと交ハ
斗長の前にはまも通くま
蚊くあや流くままま
細の枝おとあけく刺ハ
あくく脈けつけく習せ
京く何くくぬのハ小便

絡 同 絡 同 豊 玉 絡 同 豊

け丸の可き糸瓜をよしの事し
 三三ハミテハ断琴のね
 月の夜望しそ及ぬの思く居
 人のけし追ふち乃ぬす人
 けし馬あし樹はあし可拍子ら
 味嘈のあしに喜ハゆれぬ
 たるやくにちこのあしゆあしき
 ああ長好ハ昼々あかつき

玉 用 雙 路 小 碇 同 豊

りて明くえれしむの思く事
 けり草しそ生みしそ

同 碇

古事集

赤糸のきくに信とらしき
 いやしり頂陀をさふ時

二本うけをばいありし麻の角
 一文通

同 碇

富寺の宵中つゆりまの秋
 石物

草やほろよかくあしめ
百物

卯の子は雪にちりり
如雲

アゆと踏りて
廣地を尋ね

おけつをばあ
ちりり

古山
ちりり

鈴をア振木の
とゆる上庵
お同

挨拶

月の舟早より
舟へ僧りり
古山

四季混雑

八重子麻もは
くハくめは
牡丹
舟
力川

涅槃會マ
つをよ
ハ告上り
仙臺

すくく
ちふ山の
あしほ
きん
深南

日の霞
お山に
倒あり
か人
こ
洛吳

侍の
あし
樹ハ
寺し
おほ
ら
月
六梯

ゆす
人と
こ
や
く
は
あ
り
せ
や
む
南乃

は
さ
く
し
ス
ス
ら
ま
や
う
お
つ
ま
墓亭

埋木の
むか
と
う
治
め
は
ら
舟
舟人

宇と山とあはむくみヤ丁のあ
 余の雁くかき腹もある 瓢箪
 ちよ移くあしらくあはるさのあ
 葉ア香ハもあ 耐くおく
 ちよまはあちよくくア及本立
 ちよとあくくむちよくあはる月
 凡 沈と足くくすあアちのあ
 陸 くことつてもあ、瓢箪 却

了進の尾に吹あけれ一葉却
 鞘あもたうい、ちよくすちよ
 かくれああめ尾に目あるちよのち
 凡 沈の音吹下りあ一葉くあ
 山をの謡くめちよさくくちよ
 惟むやちよまの凡のくくは
 引くよああ酒ア待のあ
 遠のうに標を峰上あを吹あ

胡女

晴州

寸豆

孝文

去路

奇魚

乙標

曲豆 4

東心

道晴

左心

魚角

木柳

寸豆

其則

不答

鶴立くあゝねしさまの雪
戸窓の底はくゆるおきと
けし合に鳴るや子向や終みお
丁回
三枝
吉山

文通

聖霊の目くつり十万余
一月ははのまねるおの了
山伏のまよとみふちを叩え
まほしき年永むおハあれよの月
常回
百川
百枝
栞路

はの国は其尾の海んいと伝む
司野々旅平ト余む

つとと製りけちの中乃伝の音
ほほとまね流りやくぬまふ
上麻の音"ぬまふりまゝ流し
吹れて"流へ織こむぬ葉糸
杜菱
お回
司野
柳長

けろ又神あゝお

まほ神回の二ま
やま

水仙の明早にまゝに花を

卯酉

わく先くふゆはちの友

梅路

昨日詠の雅主梅路師とまゝに

鯉魚の寸心と寄る

文墨に用はれ風や冬あふま

百柳

隣乃春と同一花々香

梅路

足両り、羽根のあふまを合ふ

卯酉

昨日伊賀の公儀

後ハマ山踏吹はるを合ふ

卯酉

下邦去文通

踏次あけく梅と通すやまのる

百柳

下めいわく田舎やすむ蕪布

二王に草むすひありんさる

呈於周師

善言志

竹依金律く子陳了るあつて希用

従文の去跡しとてさるに仲路の風友

九
うれうれめになつちあつて今おけり下者
又たあ大和うち山あり洛し百川あり
能くしに司鄭有といぬうけ三子又ゆと
あや百梅再振ういひむせう同推
集つて言小者あううく道と説く敬表
あうあう侍とむすんく近晩うき表あり
凡け三流地う投うとるへうれ夫種
可心所着ちう何もけりやう友あり人

此春秋の思けり感うく物うやうんすの
あううれうく表うきうきれうきうき
あうう七五のねんぬさうハ鴉の烟に叫ぶ
佐削の塵坂うあやうき七五邦の御詠
ハ師うあうんかく云う録とあまやうに
似うう付ハ鳥虫のうきうきりめお
あうんう人ハうさ長うう四雷上のうき
あううあうハあうううううううう

ひくゆらふろくゆ。春よ似く笑くねと
雅とせんくも衰敗も字陳し人うし北
理商と公頭くくそにたのしみと極んと
やめくや他諸の用とらふるくもふにまれ
おしられくいふ。賞とよろくふの片の
ちよお杯ハ風雅と集んくく四民乃
産と人倫のそくふハ風雅と道と
きんくく聖の朽くくとる人くく秋と

凡雅く阮瞻きんくく儀ハ今日の世命し
り。雅と学んくくほくくこれたもくく金屑
のほるこくもく眼医ありと呼にけくく
さくくハの三法の徒ハ先に論やの鳥虫
くく一任もくく莫逆唯青山をやく世止に
白眼すくくいりむかれハ其門くく署き人
くく鳳字とよめくく顔とあくくや
師の風雅にふくく天下に席を割く

ともつりて遊文のまぢり人び予ハ
断金の友とん品笑つたてしき
人びりしに口雅とる人
之とる物類首し

アツらむ

丁卯 卯去

谷百あま

お同

わくまれののま南と踊るたか根井の

庵うな々みまひけく淡く胞澤子
幸と解と秋くお此揚子ふれはし
く中く笑はつりぬ客にひとのを
あしむくあるはく此物茶とゆ
三軍のよにわりの不離と此茶と
よちの予金とあつて希園に
説々のぬ茶とあつて不問や
と教れにとらけれ丹心く陳合で

はうのろろいかにふくしむれば和は
人のたのしみありあはれにこのはな
きつねく我いふくさくぬ思ふよのこ
れどままはとどけするす持伴に
あつて佳しつと口を同かき語ふ
くしむるに「お供の心は」の志に
ふくんとそとちりむるまふ穴に

丁卯仲春

せらにまうすやかりらく春の
を供養東南の志は海りうめく
ささくはのろろは洛のほくハ仙のやと
おのろろ葉にむえは遠の自志とさち
あつたを葉にむえは「復すあ」の
あつたを葉にむえは「復すあ」の
あつたを葉にむえは「復すあ」の
あつたを葉にむえは「復すあ」の

始るる何事も片断に病と追わさ
けららみそアヤリヤとあむ

くくひすにほあ子あり及木立 此同

送友因物僧辞 七友湖樓

去る丙寅の秋乃けしめ相秋

鈴虫北のこほりてとて夏湖樓と席

比とあめおられしは存にすあひ

眼と鼻とて茅序に話話と

ゆりとり大和の風雅のうらるる

いと余容縁のりちとけし

い中再會と期とあむ人とあむ

芳明をうつをれむの中言とよめ

多斗等のふりてれ倉橋と

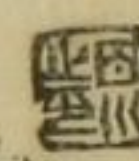
と席とりかけしあのかけ時のた

くくつ詩水もそにあつ居り

人のあをわむるし



八徳真人寫



ほくふはらふハ柱杖の立枝より

存心

清くむすふ土庵もけーく扱

取用

盆乃苜蓿く糸を尺をけく

東里

ほねすまろく此多心人ち糸

之枚

ひろもの銅の月々ててたき

鐺角

草乃花あく川子ほすや

花紙

野の目とお汁の傍つたれま

花紙

茶うたよさまゝ菓子の内也

丁固

ひいろらの風吹く山もすきさあり

胡村

山ふきの松もおむ題目

晴竹

おいしのあつ遠い伊達とく

史川

おくくあも通すく行れ

仙臺

おしらくア奴奴くく難をすくられ

文車

世も小あより雪の降おハ

孝文

かくくすも輔妻くくはちをき

志工

国乃使々巡れく来れ

弓ト

月去らあしんと花の口ハられき

南為

まきぬ麻乃ぬとらあ草

寸豆

^ナあまゆひのふくく最々のあふひ

豊州

隣へくくく夏く酒のむ

六柳

あくとゆよやくもくく年のまゆく

万枝

とくく此口教の早くわおし

魚角

笑ひ顔もすくひる伊勢のちまとの

乙蝶

この昔あははは夜あま

茶笛

中ふぬと嘆くところのあつし
去路

牡丹くゆけとるよも戸々の
右取

貧乏子れあつぬと問ふふり
道末

とふぬも月もすくふ池下
梅人

あつたきまゆに仕とてま更く
催む

笠のどんぼいなる下宿人
備戸

つらうきりおぬく橋り幸なれ
道晴

さめやす目ともろく森又橋
三子照

薨れ々唐の種よのれとゆく
千里

と守れ神ぶゆの正面
波歩

ゆき近くけし山此な子も
百川^京

ほけああおも宿らくれ
洛見

おのくほくきまの
送おあつ累

五月のけしりハ仙観し付ひと
又と遠坂の奥にゆれちかくれハ

ゆねる人くきと通るまじし

こちとむく顔しと瘦あれ清あハ
百川

武塔東鳥車

よほくのまきくし追ま暑氣

の用

孤涼

高国より扇乃にとへちうと糸

砥上

すしきやひよぬくたの栲の糸

百抽

か山より留おありし糸のまきく糸ハ

まき糸のむしきとくれ高軫此

糸と糸四とやまけん芝はく

卯路と髪し

麻州より糸はやくれと旅了りし

百抽

花と糸は栲しむ時

卯用

糸方へ給仕の建ふ栲くちり

つまへて栲糸新室の塵

栲

月あらしはほく毛尺のちよみ

角力中せば皆紀て糸

用

栲はくし律くはつた糸糸

木の屑をぬき乃糸糸糸

栲

降先以苦人形くあぢふし
按摩わつて肩はあつた
お陰く暮のほろりぬちとあ
堂とぬと叫くくく
みくぬく聖の職く月ハるん
あつたおく益ふ ちと
こやけぬぬいせ乃 賦と
二ハぬすくに口灸けく

同 栴 同 栴 同 栴 同 栴

明とかとむく藤おれ侍のあ
観のくを端んくきぬく
⁺あやまの亦く火吹も働い事
いまれとゆくに牛あはまぬ
思路のあいの土山するぬこ
早松と秋くつままら
張香口の火く送くあくちちの庵
すく二丁わすくく表具ぬと同

同 栴 同 栴 同 栴 同 栴

いそぐハ茶漬ハ鼻とわげくや

捨すのたつとふよあ之味珍

たくと草あつ〜伊豆はけあけう

あ〜先入〜おれとら〜

と月ト富士〜ちれハ冬〜

〜尾ふハおと〜め〜め〜

物草あけけ〜あ人〜

又あみ〜さと〜く〜

梅

同

梅

同

梅

同

梅

同

ひよさ〜中〜烟〜

ぬれ〜も〜

松のけ〜

あ〜の〜

あ〜の〜

〜の〜

つ〜の〜

お〜の〜

梅

、

同

同

同

同

石橋とくはまいて全知のたまは海をさむす
 吸露菴の額をくくむく雷門のおうま
 又やしてふけ地をうんく涼堂の名と
 けいせん

あけけをばはきあまあま 涼堂

又々くくくくくくくくくく 石橋

偶作

あまのまよのぬすれ柳の卯 石上

宇野のひくく西やけり梅 可少

君のたふさひくくくくくく 田代

稲刈り水へ進めんとぬき 不三

昔宮下をとりや夜木を 暖友

やほいアしてたてぬき鳴子卯 雙玉

袴の針目くくくくくく 伊心

くくくくくくくくくく 貞田

あーの穂を穿てのつらぬぬのふ 白雪

まよやまの原女のおアア 舊桂

9. がとくに定り上敷田代 千本

よこ女のよをひりける 御之卯
 茶のむや昔ハ羊ひらこうてたらしよ
 南門のちもうくくや桐のむ
 新幕の一日 柳ありすれん
 松より一ふ枝とある芽や鳥音
 去る魚しれをみくくやふぬら月
 ゆく丁口又送り月ハまま細し
 ろくやのふとややあね

山尺とくく啼く 諸あやはとあね
 新坊と新り寺れ 田くし時
 水もれふれく通き 小舟部
 川流くくくえれハ夜し寺の秋
 よあ草に一ねくねむむやなのあく
 やア子まや西下のち井にくくく
 鳥のちほむや蝶のむく時
 よるくくく猫の欠とりくひくく

三

桐卯

羊精

林水

南音

桂宅

露録

芙蓉

里曉

乙女

秋午

和鳴

三楚

足子

茶車

唐河

魚圓

百梅修學記

吸露庵

二梅中の記

れよとくんふおとく一葉ゆ
る梅

同ちおとくふ松とまら

くふふふふふふふふふ

ち刀もちのふハふさうわや
秋のこ

いのち此野にうさうさ
、

み

袖垣く福しおとくふふふふ
、

ゆるゆるの浸りうさやいけの
、

早もふふふふふふふふ
、

灯ふと松野の中一十
、

けなハふとやふふふ
、

乃しおりうゆふふ

丁卯十月十七日時の導修時外の二字を
あふふふ百梅居士のふふふふふふ

春に存儀、あつて四柱、うらりり
おのこは、ほあり、れむ、つら、い、は、ら、う、て
誰く、と、あり、い、合、せ、あ、や、秋、の、末、あ、る、人
予、と、共、こ、に、あ、り、く、病、床、り、似、澄、や、る、時
ふ、や、す、い、く、け、く、な、枯、野、の、う、れ、ぬ、境
と、ふ、れ、は、い、に、翁、ハ、能、聖、し、す、ら、ハ、口、々、と、
も、め、く、は、い、と、共、と、又、枯、野、に、あ、り、く、葉、の、み
ち、ま、い、た、の、け、と、ま、い、く、詩、一、向、ら、

「即、今、是、夢、中、の、説、い、ま、さ、し、あ、れ、枯、野、乃
一、夕、と、會、す、や、二、梅、吾、友、に、あ、り、あ、り、に
道、あ、り、跡、あ、れ、ハ、さ、や、と、ハ、ふ、れ、く、あ、れ
ハ、さ、や、け、れ、な、念、可、く、は、云、り、く
「あ、ち、と、ろ、つ、る、眉、と、あ、け、く、解、ら、み、り
う、と、道、と、い、持、来、り、尺、せ、よ、予、口、い、
ひ、く、人、と、ま、れ、ハ、松、松、と、あ、り、秋、口、と、掩、ふ
予、笑、く、止、ム

あつくり〜りつるは商量なましく晋人の
ちつち林の仙の命もちり〜る
他諸の情勢よりかく詠詩の理を
をる九只情詩の可なりとて其の場
に是非をこす〜りねは世病と辞して
他諸の世説ふらんや洛の百川しつ
る〜ありあゆる〜人〜り〜り
一埃一核を三〜り〜り〜り

了は枯野の回答よりて題せん〜り
志〜り〜り〜り〜り〜り
とた〜り〜り〜り〜り〜り
ま〜り〜り〜り〜り〜り
さ〜り〜り〜り〜り〜り
他の命をおか〜り〜り〜り〜り
空の西を〜り〜り〜り〜り
て大江〜り〜り〜り〜り

ちとりに友可きるりとてかけぬのすん
むすんく隅田川にさるりあそび使あ
りれけ人と矢ひりと後の誰彼と報よ
おハハ霊とむと舌弾すに家足破上
ちとりの瘦く笑させぬしゆはく
売く母はくくけふちかみくえとく
して風推とされまらかマニ神とあ
きぬ原とあそぶさりマと中

海らりとあつとけききめるときき
のあそびとてあそびとあそび

茶はあけいひまは枯れ
百柄
仙寺

あそびとあそびあそび
砧上

諸家の追悼あり畧し

延享五戊辰春

書林

江戸日本橋第一丁目
梅村宗五郎

東寺町二條上
井筒元左衛門

羨桂堂藏版誂書目録

南北新話

前篇 上下

涼代市

うゝややく

浮葉菴 叟言

伊勢のはり

女山

雙飛

涼代市
独吟意の百韻

涼代市

枯唾問答

全

百梅

海乃きり

李趙

百題集

全

百梅

うゝやくすこ

全

いせあや白鳥

東武

李趙

はなゆづり拾遺

重河

物話
餘負 續之足摺

涼代市

連中

はなゆづりの梅

涼代市

中
社
林
一
勺
立

東武

桐原

續白鳥集

全

秋
無
穂
家
の
や
り

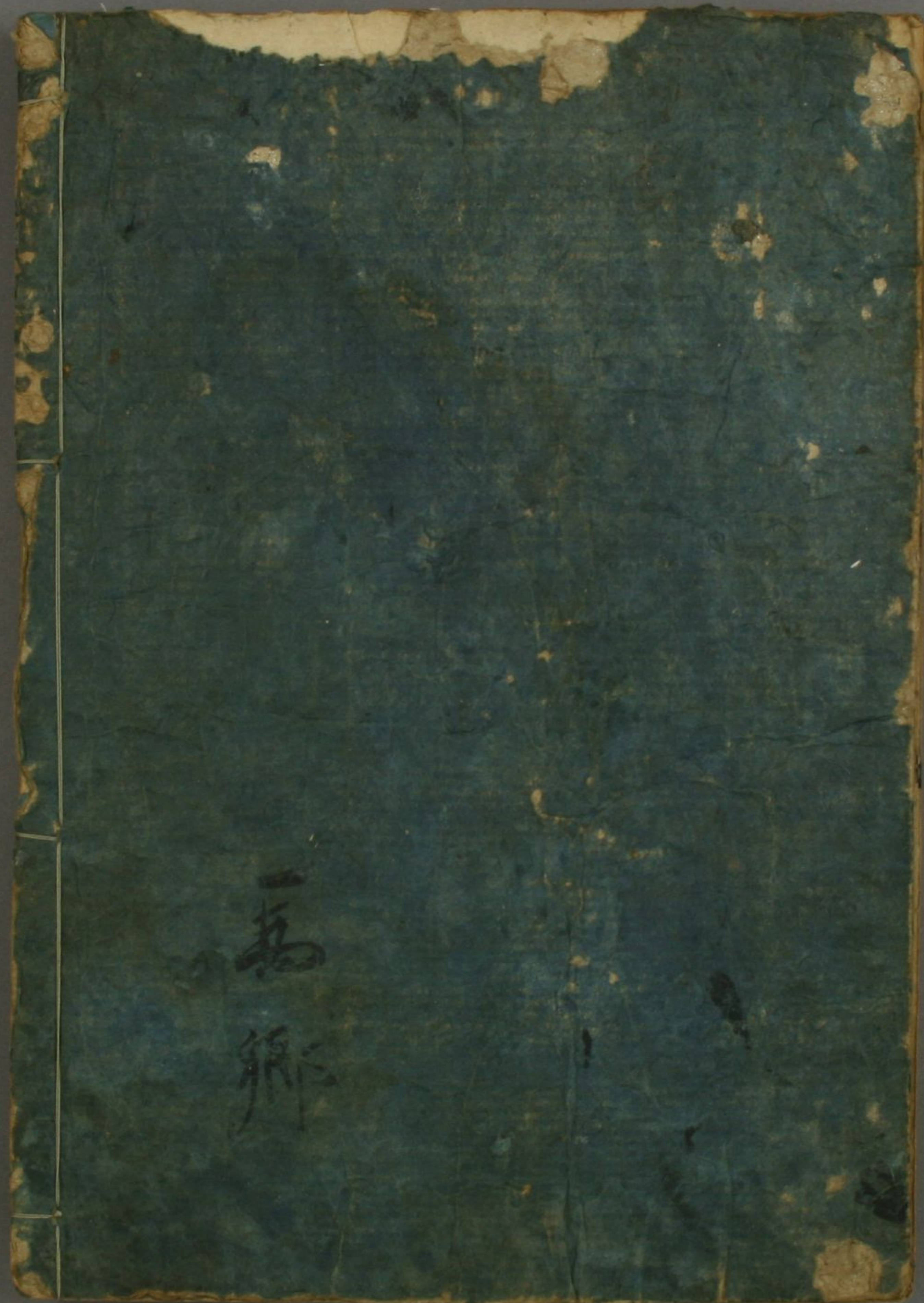
全

林水
蒼里

江都
本

梅村宗五郎

梅村宗五郎



嘉鄉